巻頭論文

“持続可能性”から考える21世紀の環境経営と技術

オゾン層の破壊，地球温暖化など，21世紀を目前に人類の社会経済活動が自らの生存の基盤である地球生態系を破壊するほどの規模に達し，これまでの“大量生産，大量消費，大量廃棄”型社会経済システムがもはや持続可能ではないことが認識されるようになった。

今後人類は，21世紀を通して“持続可能な発展”“循環型社会”への移行という壮大な変革を推進していかなければならない。これは，科学技術体系や社会・経済システムから倫理・宗教・思想といった人類文化全体にわたる世界史的な最大級のパラダイムシフトとなるだろう。このため，21世紀の企業経営や技術開発の在り方を考える上で，“持続可能性”という原則についての深い理解が不可欠になる。持続可能性の原則としては，スウェーデンの科学者達が導出した“四つのシステム条件”がある。これは，人間社会の物質循環も自然の循環に組み込まれなければならないことを教えている。

21世紀の経営システムでは，利益計画の達成と同等の次元で社会責任と環境責任を達成するためのコーポレートガバナンスが確立され，それらすべての成績が社会に対して正確に説明できるアカウンタビリティも確立されていなければならない。

21世紀の技術パラダイムでは，人や生態系の安全がますます重視され，これ以上の環境汚染を防止する“予防原則”“後悔しない戦略”といった価値判断の基準が定着するだろう。生命に安全な技術，クリーンエネルギー，そしてリサイクル等に代表される資源生産性の向上にかかわる技術が21世紀技術の本流になると予想される。

技術に立脚する当社は，持続可能性の実現，循環型社会への移行に向けての新しい技術開発と事業化に大きな可能性を持っており，歴史的パラダイムシフトに果敢にチャレンジしたい。

三橋 堯
東 和彦
吉田敬史